

婦人の修養

云ふ勿れ婦人は見識狭しと、云ふ勿れ婦人は知識淺薄なりと。修養の機會を與へずして、此の如く云ふは、誠に云ふもの、誤なり、妙齡二八即出で、人の家に行く、妻の讀書を喜ばざる夫あり、妻の交際を好まざる夫あり、而して少き妻は、一切を抛ちて、夫の給仕に侍せざるべからず、庖厨を司とらざるべからず、裁縫を自らせざるべからず、會計出納の任を負はざるべからず、子を育せざるべからず、而して最も困難なる舅姑の機嫌を取るを勉めざるべからず、日夕此の如く忙殺せられて、遂に自己修養の機會を與へられず、女學校時代の智識は漸く印象を薄らぐると同時に、讀書の興味も亦厭伏せらる、修養せしめずして、而して敢て婦人の知見乏しさを誹る。誠に誹る者

の罪にわらずとせんや。婦人に修養の機會を與へよ、これ實に婦人の地位を進め依つて又社會の發達を大にする所以なり、

保育法改良の第一看手

幼稚園に於て、幼児に文字を教へて得々たる保姆あり、これ明に幼稚園の主旨に反する所、幼児將來の發達を阻害すること大なり。目前の成績に誇らんが爲めに、複雑極りなき困難の手法を課し、併も幼兒をして爲さしめず、保姆自ら之を仕上げた土産と稱して持ち歸らしむる者あり。爲さんと欲する幼兒の活動力を阻害し、工夫想像の力を働かしめず、遂には、自ら働かずして、一も二も他人に依頼する傾向を助成せしむるものなり。擧げ來れば此の如きもの頗る多からん。幼稚園保育

法に改良すべきもの少からず。併も此の如き弊風の改良は宜しく先づ其第一着手たらざるべからず。

教育家の理想

前田長太

美術家に取りて其最も大切なのは理想である、理想なき美術家の作品、若くは理想低き美術家の作品は實に見るに足らざるものである、一幅の畫宛として聲あるが如く、一魂の石宛然生命あるに似たるは、美術家が其腦裡の高崇なる理想を顯表するが爲に苦心經營せる結果なる事は人の普く稔知する所である。

教育家も亦是れ一種の美術家である、否教育は術中の術と云へば、教育家は美術家の最も大なる

者と言つて宜しい、其の托せられある兒童は、取りも直さず是れ其の理想を顯表する有聲の畫、有生命の石である、其の技量を發揮する作品と言つても差支ない、勿論貴重なる作品と言はなければならぬ、有心の人間、萬物の靈長であるから……然し既に惡癖邪習のあるときには、教育家の最も苦心經營を要する所である故、中々困難なる作品と云はなければならぬ、之に理想を吹込んで、眞個萬物の靈長たるに耻ぢぬ人物とするは、正しく是れ教育家の技量の存する所である。

去れば教育家に取りて必須缺く可からざるものも、亦是れ理想である、始終理想を腦裡に浮べ、理想を眼前に立て、如何にせば此の理想を兒童の上に實行し得べきやと云ふ事は、其の一生の天職である、理想なき教育家、若くは理想賤き教育家